

ざるべけんや。(小笠原千鶴、帝國海軍史論)

回天艦の來襲に遭ふ

元帥伯爵 東郷平八郎

明治二年私は三等士官で春日艦に乗組んで居りました。甲鐵艦に率ゐられ、春日、陽春、丁卯の四艦並に飛龍、豐安、戊辰、晨風の四運送艦は函館征討の任務を帯び、三月九日威風堂々として品川灣を出港しました。途中風波の難を避けて、陸中宮古港に寄港して居つた際、端なくも賊艦回天の來襲に遭ひ、舷々、相摩の大血戦を演じた事がある。賊艦回天艦長甲賀源吾は賊ながらも、六十年後の今日に至るまで、私の歎賞措く能はざる勇士である。當時年齢

内容見本 (67%縮小)

僅かに三十一歳の壯年であつて、幕府の海軍に出仕してより既に七年の實験を積み、沈毅寡言の膽略家であつた。幕府の海軍總督榎本釜次郎の片腕と頼れたる武士であつた。榎本艦隊が品川灣を脱して北航せる際は、軍艦四隻、運送船一隻より編成されてあつたが、其後異變續出し、翌二年の春に於て役に立つのは回天、蟠龍、高雄のみとなつた。そこで甲鐵艦を途上に要して、之を捕獲するの策を定めた。命き遣敷の計略のありとは夢にも知らぬ官艦の兵員は、三月二十五日午前四時半總員起床の鼓音(當時は鐘)に目を覺して起出でた。乗組士官の多くは尙華胥の國に遊んで居つた。命き折しも一掃一烟突の一艦が米國軍艦旗を明渡る空に轟しつゝ、進んで來た。我が各艦の乗組員は上甲板に集つて、投錨

東京『都新聞の本書に対する批評』

宮古灣海戦の雄 『甲賀源吾傳』 付函館戦記 石橋絢彦著

明治二年春、陸中の宮古灣に於いて行はれた幕府の軍艦と官艦との激戦は、わが歐式海軍の最初の戦闘として帝國海軍史の重要な頁をなすものである。

此の海戦は、戊辰の乱に函館に脱走した榎本武揚の部將回天艦長甲賀源吾が官軍の優秀艦、甲鐵艦捕獲を策し、折から征討の途にある官軍艦隊が宮古灣に集合しているところを襲ひ、壮烈なる接敵攻撃を敢行して、わずか三十分程の間に両軍の死傷百余名を出したほど激烈を極めたものであった。

本書は灯台建築の權威として知られた故石橋絢彦工學博士がこの宮古灣襲撃の際悲壯な戦死を遂げた回天艦長甲賀源吾の詳しい伝記、並びに薩長の幕末の形勢と函館戦争を記したものを甲賀源吾の嗣子甲賀亘政博士が上梓したもので、わが洋式海軍の播磨時代の有様を審さに伝へ、また幕府滅亡の消息を豊富な史料によつて記している点に於いて史家の参考に資する所大なるものがある。



今回の復刻版の装幀です(デザイン・毛利一枝)



日本海軍初の壮絶な海戦
にして戊辰戦争の華
78年ぶりに復刻!



回天甲鐵艦捕獲の図

回天 甲賀源吾傳

附函館戦記

石橋絢彦[著]

限定三百部復刻

マツノ書店

狼狽名状すべからざるものあれども、合旗を舉げて汽罐に點火せしむる等の命令を發せり。橋上に在りし安藤太郎は腕を貫かれ、ニコール氏は大腿を傷く。皆病室に入りて治療を加へしめ、司令官は船首に往きて指揮す。

回天艦員の奮戦

接舷攻撃はニコール氏講義の如く我が舷端數所より一齊に躍り込み銃を發する暇なからしむるに在り。今は甲鐵へ躍り込むべき一路あるのみ。且つ甲鐵の甲板は我が舷より一丈も低き故身體輕捷の者に非ざれば飛込み難し。又敵は舷側に隠れ銃鎗を以て我を衝く故、容易に乗り移り難し。乃ち各分隊順序を以て躍り込む事と爲し、司令官の侵入せよと令するや、一番分隊長一等測量大塚波次郎刀を揮ひ一番と叫びて甲鐵へ躍り込みたり。大塚は豫て此戦は一分時も猶豫を許さず、隊士相顧み相率あるを待たば機を失はん、諸君我に従ひて先登を努められよと激勵せしが、今其言を實行したり。次で新撰組野村理三郎、彰義隊差圖役笹間金八郎、同差圖下役加藤作太郎等乗り移ると雖も、敵はガットリング、ゴンと稱し野戦速

第六章 宮古灣の海戦

二〇四

回天艦長甲賀源吾傳外編

二〇四

射砲の如く、車臺に六發砲を載せ、筒尻の機械を運轉し、ニール銃彈二倍大の彈丸を一分間に百八十發を發射する優力なる砲を發する故、乗り移る者は打ちすくめられ、大塚其他大概燈されたり。彰義隊士伊藤彌七は甲鐵に躍り込みたる際如何にしけん帆に包まれながら敵數人を狙撃し、回天が甲鐵を離るゝ時飛還り微傷をも負はず、水兵渡邊某は大砲を扱ふ棍棒を携へ甲鐵へ飛び入り、棒を揮うて數人を倒し、歸艦の時に追はれて刀を以て斬り付けられしに、着衣を切られたるも身體に負傷せず。蓋し生還を得たる者は此二人のみ。二番分隊長軍艦役一等士官矢作沖鷹(初名平三郎)船首に在り。短銃を以て敵を斃したりとて得意なりしが、將に刀を抜き甲鐵に躍り込みんとする刹那、一彈胸に中りて伏す。勇を鼓して起たんとする時、兩眼を射られて斃る。軍艦役並渡邊大藏、見習一等筒井專一郎は詰所にて即死し、見習二等布施半(初孫三郎)は一丸腕を貫き、一丸腹に中り、函館に還りて死す。見習二等砲手小幡忠甫(初一郎)は即死、其傍に在りし四十斤砲掛り三浦功は無事なりき。船首に在りし神木隊長酒井良祐は右腕に負傷し、神木隊士三宅八五郎、川島金次郎、古橋丁藏、酒井鏑之助(良祐子十六歳)は彈中にて死し、相馬主計、陸軍奉行添役



懐かしい書物

『回天艦長甲賀源吾傳』

作家 中村 彰彦

石橋絢彦撰『回天艦長甲賀源吾傳』は、昭和初期に出版された歴史書としては貴重な特徴をいくつか備えている。

第一に活字が大きく、組版がゆったりしていて版面が美しく、大変読みやすいこと。第二に、ところどころに挿入されている写真や図版も鮮明であること、などである。

以上は視覚的な事柄だが、編集もとても丁寧になされているので、まず「本傳」「外編」「附録」の三部から構成されている本書の内容を把握しておく。

「本傳」はいうまでもなく甲賀源吾の個人史を語ったくだけた語りであり、この主人公が天保十年（八三九）正月三日、遠州掛川藩の旗奉行甲賀孫太夫秀孝の第四子として生まれたことから書き起こされる。安政五年（八五八）二十歳にして前年に新設されたばかりの海軍操練所に入った源吾は、航海術を学んで幕府海軍の草分けのひとりとなっていた。

同六年、幕臣に採り立てられて、軍艦操練方手伝出役、三等士官に任命されたことにより、源吾は測量学、海上戦法、造船学等のプロとして人生を歩みはじめた。江戸湾の測量、小笠原諸島への出張、十四代將軍徳川家茂の送迎などで場数を踏んだ源吾は、もしも平和な世に生まれあわせていれば、七つの海を航海することもできたであろう。

しかし、当時の幕府はすでに末期症状を呈していた。慶応四年（八六八）四月十一日、薩長両藩を主体とする討幕軍は、江戸城に無血入城。五月二十四日、徳川家の十六代目徳川家達（いんざう）は駿河、遠江、陸奥のうちに七十万石を与えられる身となったが、その七十万石では旧幕臣とその家族四十万人をととも扶養できない、という大問題が出来た。

これを見た旧幕府海軍副総裁榎本武揚は、旗艦開陽丸以下を率いて蝦夷地（北海道）へ脱走。旧幕臣たちを食べさせるために蝦夷地政府を樹立するのだが、旧幕府軍艦回天の艦長となっていた源吾はこれに同行し、開陽丸の沈没によって断然不利となってしまうた新政府軍との戦いを起死回生に導くべく、新政府海軍の最新鋭艦甲鉄の奪取を考えはじめた。

明治二年（八六九）三月二十五日、その考えはすでに陸中の宮古湾まで北上してきていた新政府艦隊への突入戦として実行に移された。名高い宮古湾の海戦がこれである。

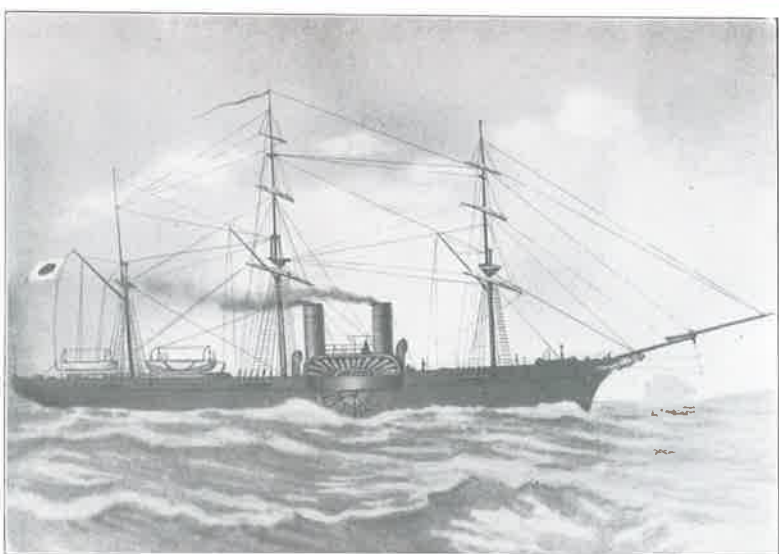
このときの榎本艦隊は、回天、幡龍、高雄の三艦から成っていた。だが幡龍は遅れ、高雄は機関が故障して、回天は単独で宮古湾へ侵入せざるを得なくなった。

「源吾曰く、我一艦と雖も、以て敵を破るに足れりと。暁霧に乘じ星旗を掲げて以て進む。星旗は米国の徽なり。既にして甲鉄に近づき、乃ち旭旗を樹つ。舵を振ぎて横に衝く。源吾予め死士を揀み、舷の接するを待ちて躍り入らしむ。是に至りて甲鉄は下丈余にあり（からだを）投下すべからず。衆遂巡す。源吾刀を揮ひて叱咤す。大塚波次郎声に応じて先づ投ず。衆相継ぎて下り、縦横奮撃す。（略）源吾乃ち巨砲を轟かして甲鉄を俯撃す。官兵快砲を以て、（回天の）艦橋を急射す。源吾身数傷に中り遂に斃る」

回天から接舷攻撃を仕掛けられた甲鉄は、甲板上に「快砲」すなわち毎分百八十発の弾丸を撃ち出すことのできる機関銃の原型ガットリング機関砲を据えつけていた。その速射を浴びて、甲賀源吾は三十一歳の生涯を閉じたのである。

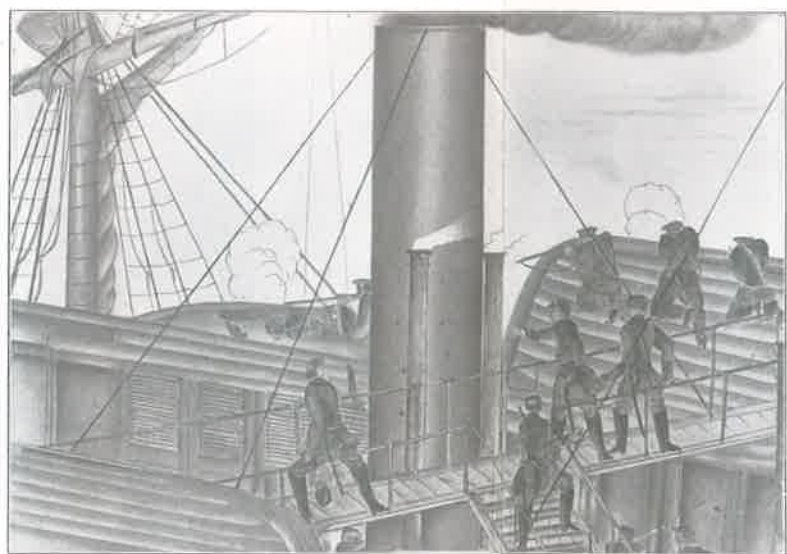
この「本傳」は冒頭に源吾個人の年譜を配するばかりか、当時新政府艦隊の春日に乗り組んでいた東郷平八郎の回想を添えるなど、目配りよく記述されているのが気持ち良い。

（表紙の写真も含めすべて本書より）



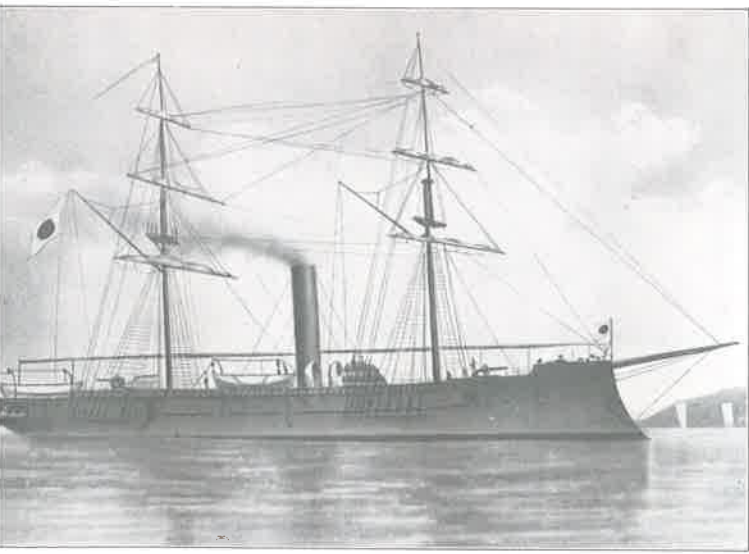
幕府軍艦回天

（品川灣戦前夜の姿、工學博士榎本武揚著『回天艦長甲賀源吾傳』）



甲賀艦長等回天艦橋上にて戦闘を指揮する圖

（左より右へ、安藤太郎、安藤太郎、安藤太郎、甲賀源吾、原田は安藤太郎著）



甲鉄（東艦）

（工學博士榎本武揚著『回天艦長甲賀源吾傳』）

つきなる「外編」は「幕末の形成と函館戦記」と題されていて、文久年間（八六～八四）の政情から明治二年五月十八日に榎本武揚が五稜郭を開城し、明治政府に降伏するまでを詳述する。「本傳」と「外編」とを併せ読むことにより、甲賀源吾の人となりとその生きた時代とが立体的に理解できるよう工夫されているのは、撰者の石橋純彦が工学博士であるため、この書物を一種の建築物として構想したことを思わせる。

また、最後の「附録」は蝦夷地政府の海軍奉行として源吾と共に回天に座乗していた荒井郁之助の遺稿「回天丸の前身ダンジック号」、旧幕府海軍総裁だった矢田堀鴻の年譜、荒井郁之助の略伝、函館に蝦夷地政府軍戦没者を祀る碧血碑が建立された次第を述べた「碧血碑と記念碑」の四編から成っていて、戦争とは慰霊におわるものであることを端的に示している。

本書は以上のようによく目配りの行き届いた史書であり、幕末・維新史、とくに榎本艦隊の江戸脱走から蝦夷地政府の成立と崩壊までのプロセスに関心のある向きには是非お薦めしたい好著でもある。

私個人のことをいえば、本書の存在に初めて気づいたのは、三十七歳にして、いざれデビュー作となる百枚の小説『明治新選組』を構想したときのことであった。主人公の新選組隊士相馬主計も回天に乗り組み、宮古湾海戦に参加したため、その史料を集めるうちに本書を知ったのである。

それから四半世紀の歳月が流れてしまったが、ある人からコピーを頂戴した本書は、いつも私の机のかたわらにあった。『遊撃隊始末』（文春文庫）によって榎本軍に参加した伊庭八郎や人見勝太郎の生涯を描いたときには、宮古湾海戦や函館湾海戦における回天の奮闘に言及せざるを得なかった。さらに、昨年出版した『軍艦「甲鉄」始末』（新人物文庫）を書いていた間も、本書を読み返す必要があったためである。

前述のように私の架蔵しているのは本書のコピーにすぎなかったが、このたび堅牢にして美麗な装丁で知られるマツノ書店が本書を復刻する運びだという。いまでは読み返すたびに懐かしくさえある本書がふたたび世に出、あらたな読者を獲得することを喜ばずにはいられない。

目次

本伝 甲賀源吾伝

- 第一章 家系
- 第二章 修学
- 第三章 始めて幕府に仕ふ
- 第四章 無人島出張
- 第五章 幕府海軍の拡張
- 第六章 将軍警衛及上使護送

第七章 英国式海軍の伝習

- 第八章 昇進・脱走・戦死
- 第九章 性行と家名の再興
- 第十章 海軍史家の論評
- 外編 幕末の形勢と函館戦争
- 第一章 文久・慶応年間の政情

第四章 脱走軍の函館占領

- 第五章 官軍の北征
- 第六章 宮古湾の海戦
- 第七章 官軍の函館進撃

第八章 函館平定

- 第九章 脱走軍余韻
- 第十章 両軍記録の対照

■本書初版は昭和7年ですが、今回の復刻に際しては、決定版として定評ある「昭和8年改訂三版」を原本に使用しました。

■文章はもとより目次から索引まで全体に細かく神経が行き届いており、端正で風格ある本のせい、古書価格は2〜3万円といつも高価です。それなのに、古書はなぜか函なしばかり。やっと函付きを入手しても函は無地で、裏に「都新聞」の本書紹介文が印刷してあるだけでした。（パンフ裏面に転載）

■復刻版の装丁はパンフ裏面の通り、本体に原本の良さを残しました。

■「七十八年ぶりの初復刻」です。この機会をお見逃しなく、ぜひ座右にお備え下さい。

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13
508340295 **マツノ書店**
URL <http://www.matsuno.com>

■体裁 A5判上製 四〇八頁
■定価 一万円（税共・円別）
■予約特価 八千円（税・円共）
■特価締切 23年3月20日
■刊行 23年4月下旬

限定三百部（番号入）

●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。